



塙保己一先生の
生涯と群書類従

世のため 後のため

誕生

一歳（数え年）

かぞえどし

えんきよう

ひのえとら

延享三年（一七四六） 丙寅

はなわ ほきいち

むさしのくに

塙 保己一 先生は、 武蔵国

こだまのこつり ほきのむら

児玉郡 保木野村に生まれました。

とらどし

とらのすけ

寅年に生まれたので、寅之助と命名されました。

父 荻野 宇兵衛（農業）

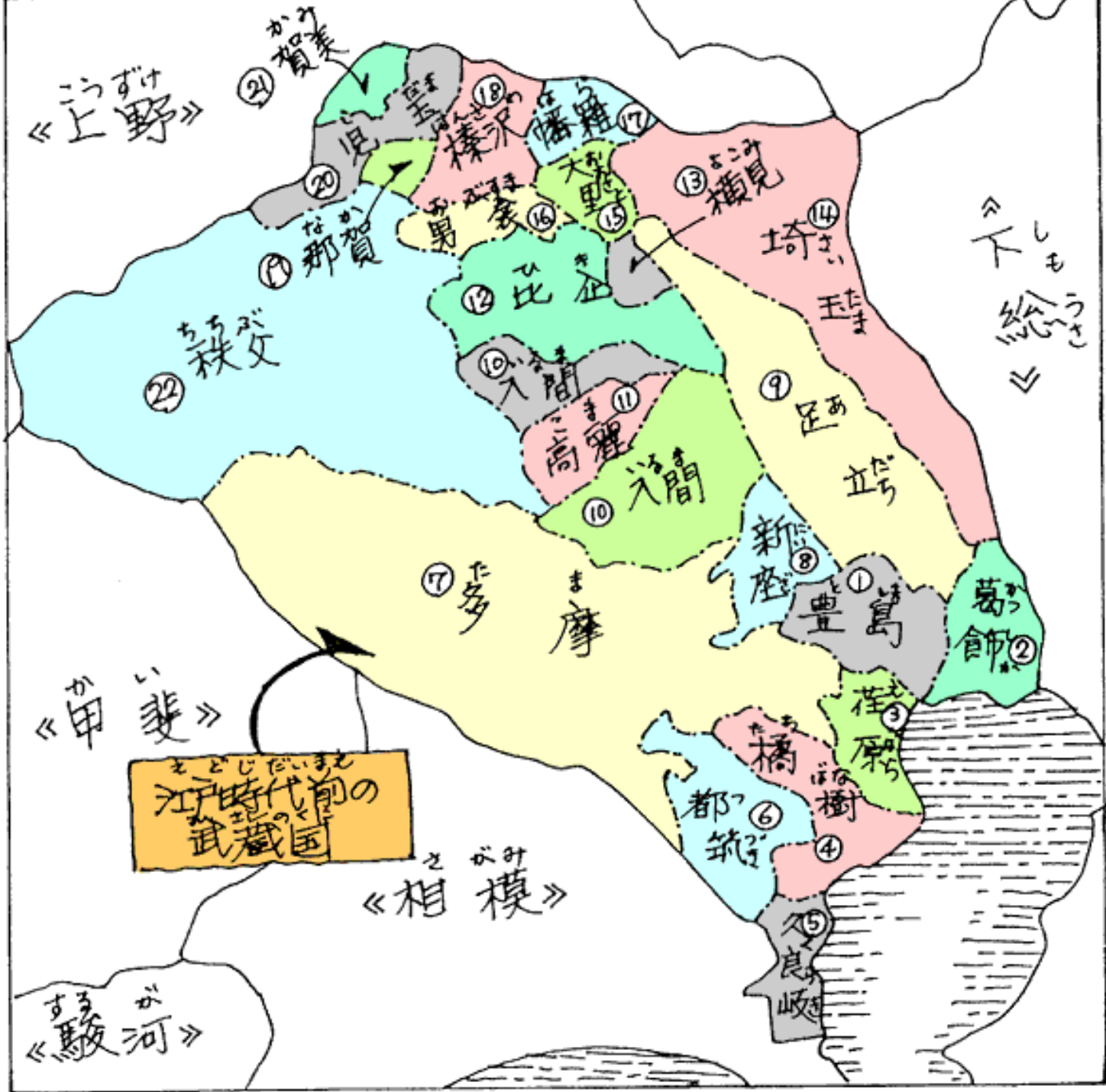
母 加美郡藤木戸村（現上里町）

齋藤理左衛門の女（娘）

江戸時代、女性の名前は「誰々の女」と書かれることが多かったようです。

江戸時代の武蔵国は

現在の埼玉県・東京都・
神奈川県の一部です



参考位置図



保木野村とは

江戸時代には民戸五十余と記述

明治三二年四月

合併して金屋村となる

昭和三〇年三月

合併して児玉町となる

平成一八年一月

合併して本庄市となる

現在の保木野地区は

八十七世帯、二百十七人

（令和三年十月一日現在）

塙保己一先生の生家 荻野邸

人物
入館4分
主ふるさ
塙

七歳で失明

宝暦二年（一七五二）

壬申

七歳の時に病気で目が見えなくなりしました。

当時の病気治療法は、

- ①僧侶にお経を読んでもらう
- ②修験者に加持祈祷してもらう
- ③鍼灸や按摩を受ける
- ④薬草（漢方薬）を飲む

というものでした。



神流川を越えて藤岡の医者
にかかりましたが治りません
でした。

桐渚家眼科医

初代 桐淵貞山 七八歳で死亡
寛延二年九月一八日（一七四九）
二代目 桐渚幸助
宝暦九年七月一八日没（一七五九）
三代目 桐淵安兵衛
安永五年三月二日没（一七七七）

誕生 一歳（数え年）

かぞえとし

えんきよう

ひのえとら

延享三年（一七四六） 丙寅

一七五二〜一七五三年なので、
二代目 桐渚幸助と推定

病気を治すため、

とらのすけ

たつのすけ

名前を寅之助から辰之助に改名

寅之助という名前は年回りが悪いということ、病気を治すため二年遅く生まれたことにして、辰之助と改名しました。

えんきょう ひのえ とら

寅之助（延享三年、**丙寅** 一七四六）

かんえん つちのえ たつ

辰之助（寛延元年、**戊辰** 一七四八）

たもんぼう

名前を多聞房に改名

池田村（現在の神川町）の修験者、しょうがくぼう

正覚房の子供と言ったことについて、たもんぼう

多聞房と改名しました。

暗記力が優れていた

保己一の記憶力は優れていて、近くの寺で子供達が勉強している様子を聞いては、先生の言うことを全て記憶してしまいました。

当時、江戸では『**太平記**』を暗記してそれを読み聞かせて名を成している者がいることを聞き、保己一は「**わずか四十巻の本を暗記すること**で妻子を養えるなら、**自分にも不可能なことではない**」と言ったという逸話が伝えられています。

十二歳

母親が死亡

宝暦七年（一七五七）

保己一を可愛がってくれた母親は、保己一が十二歳の時に亡くなってしまいました。

せいしつ みょうれん たいし

墓碑の「清室妙蓮大姉」から、後日、大野氏が『少年塙保己一伝』で、親しみをもてるようにと、母の通称名を「きよ」と命名し、それ以来「きよ」という名前だと思われています。

通称はあったと思われませんが、文面上は不明です。

十五歳 江戸へ



宝暦十年（一七六〇年）

御宝箱

そうめん箱
に紐を付け
て背負った
その後は物
入れに活用



銭二十三文の入っ
た巾着(財布)

そば一杯が
十六文の時代



保己一は、江戸に出て、四谷
あめとみ けんぎょう
に住む雨富検校のもとで、千弥
せんや
と名付けられ、盲人の修行を始
めました。

当時の盲人の職業

①音曲

平曲（平家琵琶）

三曲（箏、地唄三味線、胡弓）

②鍼灸、按摩

③金銭貸付（江戸幕府公認）

十六歳 悩み苦しむ

宝暦十一年（一七六一）

本を読みたいと思う心は、最初からの考えなので、按摩や音曲などには熱が入らなかった。

そして師匠から言われれば按摩や音曲を練習するが、暇を見つけては本を読むことを考えていた。

江戸へ出てから一年たった時、絶望から江戸城の牛ヶ渚で自殺を図ったが思いとどまった。

当初よりの大願である「**学問**
をしたい」旨を雨富検校に打ち
明けると、

雨富検校は

「弟子が生きられる職業を身に
つけさせるのが師匠の役割だ。
保己一に嫌いなことを強制して
いる訳ではない。盗みや賭け事
の他は、何でも気持ちの向く仕
事を見つけないさい。」

これから**三年間は保己一を養う**。
三年経っても仕事が見つからな
かったら、郷里の保木野に帰り
なさい」

と言った。

まつだいら のりただ

松平 乗尹（隣家）

保己一の住む雨富検校の家の隣に、松平乗尹の屋敷がありました。

おりべのかみ

松平乗尹は、**織部正**という織物・染物を司る役所の長官でした。

この人は勉強が好きで、毎日声を出して本を読んでいました。

保己一が勉強好きなのを知り、忙しい仕事の合間に本を読んでくれました。

保己一は松平乗尹の屋敷に一日おきに通い、朝四時から六時まで本を読んでもらいました。

保己一の師

国学・和歌

はぎわら そうこ

萩原 宗固

漢学・神道

かわしま たかしげ

川島 貴林

律令（法律）

やまおか まつあけ

山岡 浚明

中国の古い医学書

とうぜんじ こうしゅそ

東禅寺孝首座

塙保己一
エピソード

その六、

怒らぬ
誓い



保己一十六歳のとき、この誓いを人生観に定めたという。伝記によると「人間は小さなことで、感情的に怒るようでは大業は成就しない。どうか、この一年間絶対にそういう気持ちにならないようにと、年のはじめごとに心に誓い、それを生涯にわたって実行した」と伝えている。

この自覚と努力が保己一を内面から育てたのである。その後この誓いは、よき協力者への感謝の気持ちと誠実につくすという心に発展していったのである。

十八歳 衆分へ

宝暦十三年（一七六三）

十八歳で衆分になり、
保木野一と改名した。

「無官のときは春・了・清・弥
などを名前に用いるが、衆分にな
って郷里の名をつけることを
許され保木野一と改め正式に
『座入り』が認められた。」

当時の盲人の階級

四官（七十二段階）

ざうづ

座頭

一度、二度、三度、四度

一、二、三度の通称は衆分（しゅうぶん）

こうづ

勾当

過銭、送物、掛司、立寄、
召物、始の大座、後の大座

べっとう

別当

権別当、正別当

けんぎよう

検校

十老、二老、
一老（総検校）

塙保己一

エピソード

その二、

集中力

保己一が十代のとき、下手な按摩ながら鼻屑にしてくれた人がいた。その中のひとり旗本の高井大隈守実員の奥方は保己一の書物好きを知って、読み聞かせをしてくれた。

ある夏の晩、蚊帳の中で読む奥方は彼が蚊帳の外で両手を紐で縛りじっと聞いているのに気づいた。奥方がどうしたのかと尋ねると「蚊に気をとられると、せっかく読んでくださった本の内容を聞き忘れてしまうからです」と答えた。

その集中力に感心した奥方は、ご褒美に「栄華物語」を買って与え、保己一は生涯大事にしたという。



二十一歳 父親と伊勢参り

明和三年（一七六六）

雨富検校は、病弱な保己一に対して、「達成したい事があっても、病気になっては実現することができない。病人でも、旅に出ればなおることもある。私が考えるとこゝろ、保己一の病気も、旅に行けば治ると思う。私が五両（今のお金で五十万円）を与えるから、郷里の父親と一緒に、私の代わりに伊勢神宮にお参りしてほしい」と言った。「代参」と言います。



参考】お伊勢参り

江戸時代には、伊勢神宮にお参りする「お伊勢参り」が盛んになった。江戸から伊勢神宮まで、五百キロ近くあり、男性で一日に約四十キロ位歩いたとされ、足弱の女性も二十五キロ歩いた。

片道十五〜二十日間程度かかり、物見遊山を兼ねると往復で二か月程度だった。



歌川広重「伊勢参宮 宮川の渡し」

伊勢神宮（外宮）



伊勢神宮（内宮）



【参考】伊勢神宮

いせじんぐう

伊勢神宮は三重県伊勢市にあります。

伊勢神宮には、太陽を神格化した

あまてらすおおみのかみ ここうたいじんぐう ないくう

天照大御神を祀る皇大神宮（内宮）と

とようけおおみかみ

衣食住の守り神である豊受大御神を祀

とようけたいじんぐう げくう

る豊受大神宮（外宮）の二つの正宮が

ある。

べつぐう

せつしや

まつしや

広義には、別宮、摂社、末社、

しよかんしや

所管社を含めた、合計百二十五の社宮

を「神宮」と総称する。

保己一は、吉野山で花を楽しみ、
西行庵で、花見の人と交流し、
和歌を読みました。

『盛りには いづれをそれと
しらくもの
かかるも匂ふ みよしの花』



吉野山
(奈良県吉野町)



西行庵
(西行法師が鎌倉
時代に3年間暮
した住居 復元)

北野天満宮

保己一は、京都の北野天満宮
を詣でた時、**菅原道真**を守護神
と決めた。

二か月の旅行を終え戻ると、
身体の弱かった保己一は丈夫に
なり、以降学問への集中力が高
まった。



二十四歳

賀茂真淵の門へ

かものまぶち

明和六年（一七六九）

はぎわらそこい

萩原宗固の薦めで、**国学**の名声が高い**賀茂真淵**から教えてもらった。

真淵に就いた期間はわずか半年ではあったが、師から得た学問や研究仲間は生涯貴重な財産となった。



賀茂真淵

三十歳 勾当へ

安永四年（一七七五）

保己一の学業は、日を追って進み、雨富検校もおおいに喜び、保己一に「今の当道では階級を進めるのにお金が常識になってきている。保己一の学業は既に他の人を超えているが、お金が無いから階級があがらない。保己一のために百両を貯めたので、このお金で昇進に使いなさい。」と言った。

また、友人からもお金が集まったと言われています。

盲人の階級と官金の額

四官 (官金の額)

ざとう 八両

■ 座頭 一六四両

■ 勾当 二八二両

■ 別当 一七〇両

■ 検校 九五両 (総検校まで)

合計 七百十九両 (七千万円)

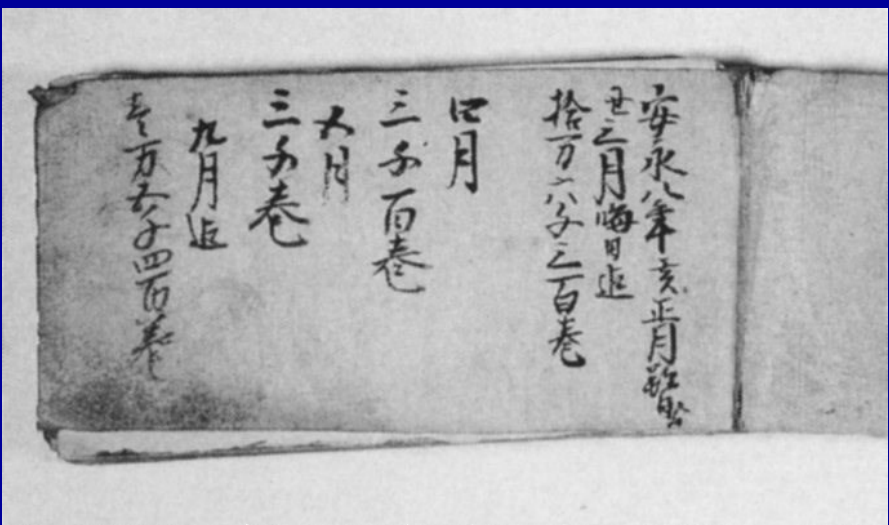
勾当の決意

私は少しの財産も持たずに勾当に昇進しました。これは天満宮の神様のお陰で、「般若心経」を毎日読んだことによる功德（効力）だ。

これからも二千日の間、百巻ずつ読んで念願すれば、検校にもなれることは間違いないだろう。

しかし、これは私個人の計画にすぎない。

私は「世のため、後のため」になるよう、人々に役立つことをしたい。



般若心経巻数帳

三十歳

名前を塙保己一に

安永四年（一七七五）

安永四年、勾当に進んだのを機に、師匠・雨富検校の苗字をもらい、塙姓を名乗り、名も保己一と改めた。

保己一は荻野家なのに、なぜ塙勾当や塙検校と名乗ったのか？

当時、既に荻野検校（琵琶法師の平家物語を編纂）がいた。

そこで、師匠（雨富検校）の姓「塙」を名乗ることになった。

【参考】手紙の文字は？

油

沽町？

日本橋

通沽町

通油町（とおりあぶらちよう）

海野土左衛門様

塙保己一
エピソード

その五、

判断力
洁町



保己一の所に「洁町」と書かれた手紙を持ってきた者が来て「この町はどこでしょうか」と尋ねた。対応した門人はさっぱりわからずにいたが、保己一は「油町だろう」と答えた。「どうしてですか」と聞くと「これを書いた人が油という字を忘れて、近くにいた人に聞いたとき、さんずいにヨシと教えた。そのとき、さんずいに由と書くべきを、さんずいに吉と書いたのだ」と推理した。本を読んでもらうとき、漢字のへんやつくり、ひらがなか、カタカナかすべてを正確に覚えていたから瞬時に判断できたのである。

三四歳

群書類従の作成を決意

安永八年（一七七九）

三四歳の正月、保己一は群書類従を作ろうと決意しました。

当時の本は、手書きの写本が多かったため、日本の古代・中世・近世の貴重な歴史書・文学書が、燃えたり虫に食われて本が消えてしまうことを恐れて「各地に散らばっている貴重な本を集めて、国学を勉強する人に役立つように」という考えによるものです。

三八歳

検校となる

天明三年（一七八三）

天明三年の三月、思いがけずに
検校職に任命された。

翌年、雨富検校が病気で亡くなる前に、「貸してある金があるから、死後は保己一に権利を譲る」と言われましたが、保己一は「私は無一文で郷里から出てきて、師匠のお陰で検校になれました。まだ官職についていない弟子達に与えてください」と返事をした。これ聞いた人は、みんなが感心しました。

天明三年と言えば

「天明」と聞いて日本史で思い出すのは、「**天明の大飢饉**」です。「浅間山の噴火」により「鬼押し出し」のように溶岩が流れ出し、多くの犠牲者を出しました。

また、東北地方では火山灰による日照不足の冷害で作物が育たず、**二万人の餓死者が出る大飢饉**になりました。
(アイスランドのラキ火山が大噴火)

保己一は、保木野の稻荷神社に日本刀を奉納しています。検校になった祈願成就で用意しましたが、浅間山噴火の鎮魂も祈ったのか。



児玉でも天明三年には

同じ時期に、本庄市児玉町の百体
観音さざえ堂も鎮魂目的に建造さ
れています。



百体観音さざえ堂

四十歳 立原翠軒と交流

たちはら すいけん

立原 翠軒

一七四四～一八二三

水戸藩士。

学者として仕官。

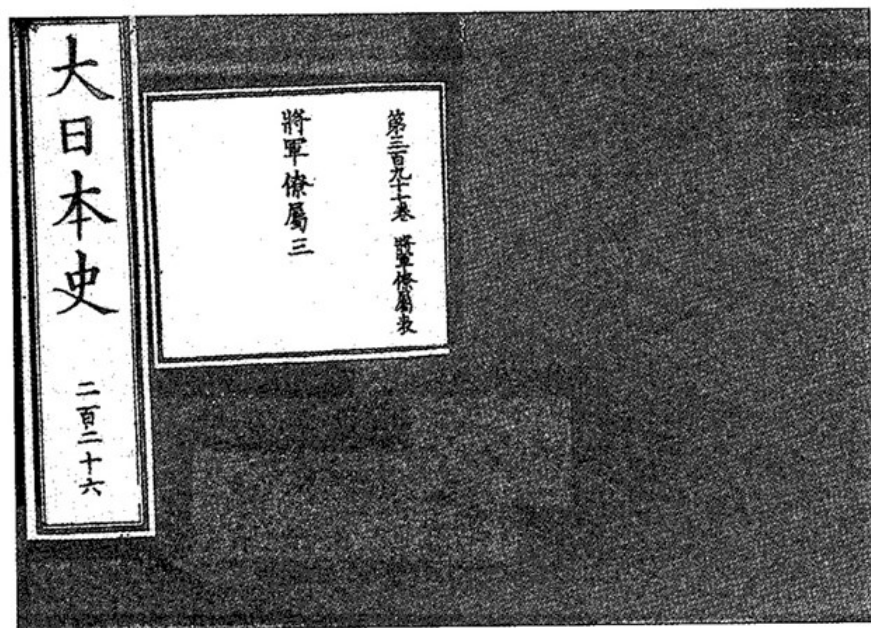


茨城県立歴史博物館／水戸市史より

安永二年（一七七三）**立原翠軒**たちはらすいけん
に出会い、「参考源平盛衰記」の
校訂を依頼される。

ここから、水戸藩と関わりを持
ち、後に、水戸光圀公が始めた
「**大日本史**」の編纂に関わる。

立原翠軒は、水戸藩内の学者の
反対を押し切って、水戸光圀公
(諸国漫遊はしていなかった)が
始めた、水戸藩の「大日本史」
(歴代天皇の歴史書)の編纂に保
己一を推薦した。



水戸藩士は

「大日本史は、水戸光圀公が始めたもので、水戸藩士が自信を持っている。研究している。」

他藩の者、まして目の見えない者が従事するのは我々の恥だ」と大反対。

立原翠軒は

「その人が盲目なのは単なる病気です。普通の盲人は音曲や按摩だが、塙は文学を業とし、業績も多い。」

役に立たなかったら、私が責任を負う」と言い、研究に参加してもらいました。

保己一の実力が認められ、御三家に出入りできるようになった。

水戸家	寛政	元年	(一七八九)
尾張家	寛政	十年	(一七九八)
紀州家	寛政	十一年	(一七九九)

御三家に出入りできる有名な検校ということで「我が家の本を読んでください」と協力的になり、群書類従の研究に、非常に役立ったと言われています。

塙保己一
エピソード

その三、

無欲



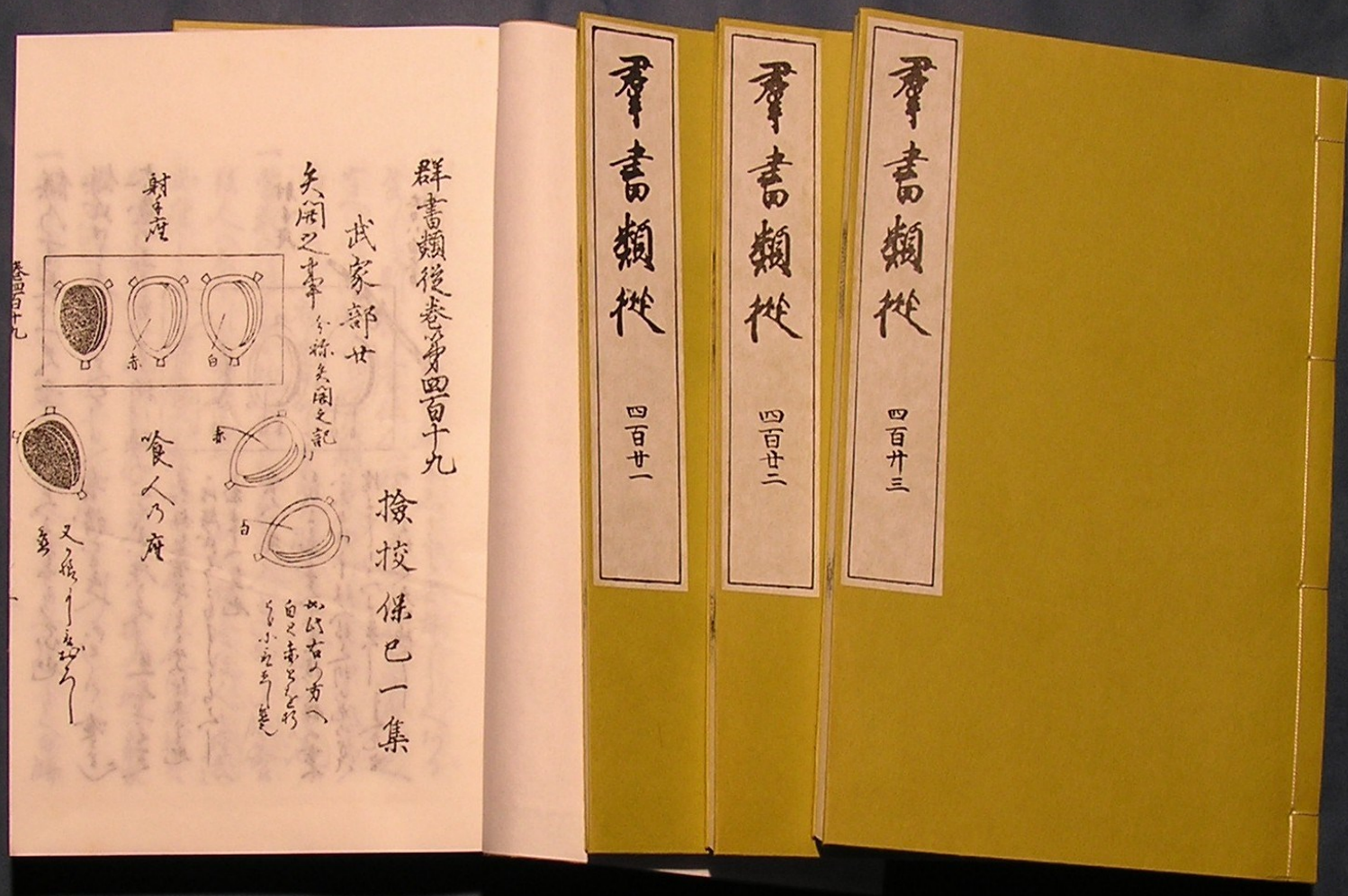
水戸家での講義が終わったあと、徳川はるもり治保（文公）から「なにか食べたいものがあるか」を尋ねられたところ、「里芋がたべてみたいとございます」と答えた。そのあと山盛りに出された里芋を満足そうにほお張る保己一を治保は笑いがら見ていた。

また、いつも同じ服装なので訳を聞くと「服はこれよりほかはございません」と言ったので、服を新調して与えたという。

保己一は、衣食代よりも本代にすべてをかけたのである。

四一歳 群書類従の宣伝開始

天明六年（一七八六）



四一歳 群書類従の宣伝開始

宣伝文

右之書次第にかゝはらず、望の者多く有之候卷、去々月より一二冊づゝ開版仕候、いづれの部にても御好に任せ候間、

御懇望の方は、当六月廿五日より十月六日迄に、土手四番町塙検校宅え可被仰遣候、

猥に開版不然ものも御座候に付、摺たて式百部を限り候間、其後は御断申候、

料は 今物語の通の紙仕立にて、紙十枚 六分二リン、仕立 四分五リン

いちわいちげん

に御座候、（大田南畝の『一話一言』）

予約販売

群書類從

群書類從

群書類從

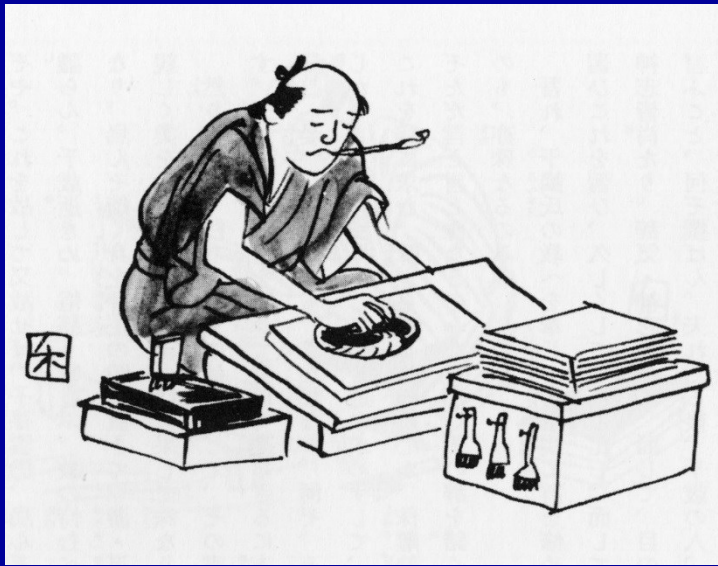
群書類從

版木の作成

多くの職人の手を経て刊行に至る



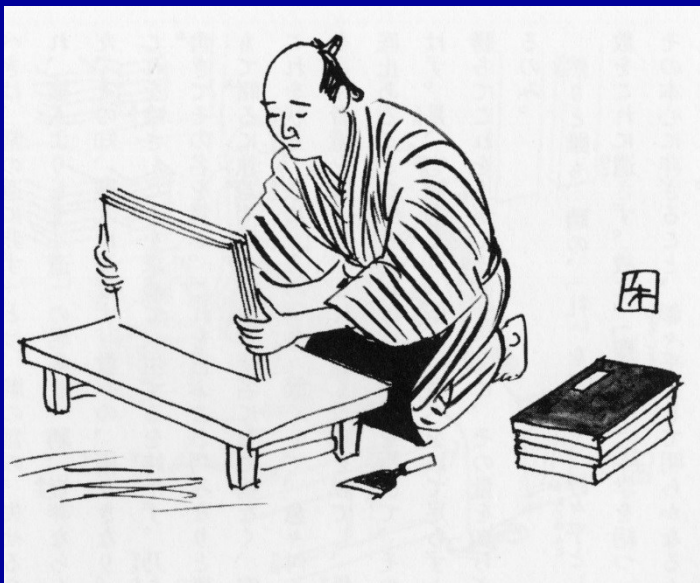
(1) 二層紙に書く



(3) 刷る



(2) 版木に彫る



(4) 製本



群書類從卷第四百七十四

檢校保己一集

雜部廿九

十七箇條憲法

聖德太子

一曰以和為

為宗人皆有黨亦少違者是政

或不順君

下睦諧於論事則

事理自通

二曰為

極宗可

其下

聖德太子十七箇條憲法

有財三

食民則不知所由臣道

結果は、膨大な借金

利益を度外視して群書類従
を制作・販売したため、保己二
の死後には、多額の借金があ
りました。

千五百両の借金

一両 ≡ 約十万円相当

積算根拠 群書類従の販売価格

文化六年（一八〇九）

四八両一分二朱四匁四分四厘

平成（生誕二五〇年記念）

五二四万円

一億五千万円 ← の借金

（「『群書類従』 版木と刷立出版事業」 斉藤政雄）

無利息の百年返済

保己一の借金千五百両を息子の
はなわじろうただとみ

塙次郎忠宝に書き換えたが、無利息で百年返済という内容だった。

ここのいけいすけ

くさまなおかた

貸し主は、鴻池伊助（草間直方）
だった。



「なにわ人物伝く光彩を放つく草間直方」三善貞司

時代背景

(1)



第八代将軍**徳川吉宗**は、紀州藩主時代の藩政を幕政に反映させ、増税と質素儉約による幕政改革、新田開発など公共政策、公事方御定書の制定、市民の意見を取り入れるための目安箱の設置などの**享保の改革**を実行した。

時代背景

(2)



田沼意次 三十歳頃
牧之原市相良史料館蔵

ためまおきつぐ

田沼意次は、安永八年

(一七七九年)に政権を握り、
商業資本を重視した産業振興
で幕府の財政を好転した。

しかし、都市が繁栄すれば、
農村は荒廃する。

更に、**天明の飢饉**により、農
村では一揆や打ちこわしが続
発した。

時代背景（3）

松平定信は、徳川吉宗の孫で、次期將軍候補だったが、儉約儉約とうるさくて田沼意次に嫌われ、白河藩に婿入りさせられた。

松平定信は、白河藩主として率先して儉約に努め、領民に対する食料救済措置で飢饉対策に成功。

松平定信は、田沼意次を失脚させて老中となり、幕府の改革にとりくむ。

寛政三年（一七八七）
かんせいのかいかく
寛政の改革



松平定信

時代背景（4）

寛政の改革（かんせいのかいかく）
寛政の改革は、江戸時代に松平定信が老中在任中の一七八七年から一七九三年に主導して行われた幕政改革です。

徳川吉宗の「享保の改革」を理想とした**緊縮財政**、**風紀取締り**による幕府財政の安定化を目指した。

寛政異学の禁（いがくのきん）
儒教の朱子学を幕府承認の学問と定め、聖堂学問所を官立の昌平坂学問所と改めた。
各般の学問所でも、国学の講義はなくなった。

四八歳 和学講談所の開設

寛政五年（一七九三）

塙保己一先生は、寛政五年に、和学の研究や教育をする和学講談所を設立しました。

儒教の朱子学を教える官立の昌平坂学問所に対し、国学を教える和学講談所は私立学校でした。

この和学講談所では、群書類従の制作も行いました。



天満宮

講談所

居住棟

入口

和学講談所復元図

塙保己一が幕府に願って設立した和学
講談所の配置復元図。成沢福松図。

住居

講談所

天満宮

和学講談所

和学講談所の指導者

（1）塙保己一

（2）会頭

なさ くざえもん かつよし

奈左 九左衛門 勝臯

やしろ たろう ひろかた

屋代 太郎 弘賢

よこた まごべえ しげつぐ

横田 孫兵衛 茂語

まつおか へいじろう ときかた

松岡 平次郎 辰方

（3）頭取

しゅつやく

（4）出役

（5）稽古人世話心得

（6）稽古人

講義内容

当時は「寛政の改革」で中国の儒教（朱子学）が奨励されていたため、和学を学べることは貴重なものでした。

講義内容は、歴史（古事記・

万葉集）

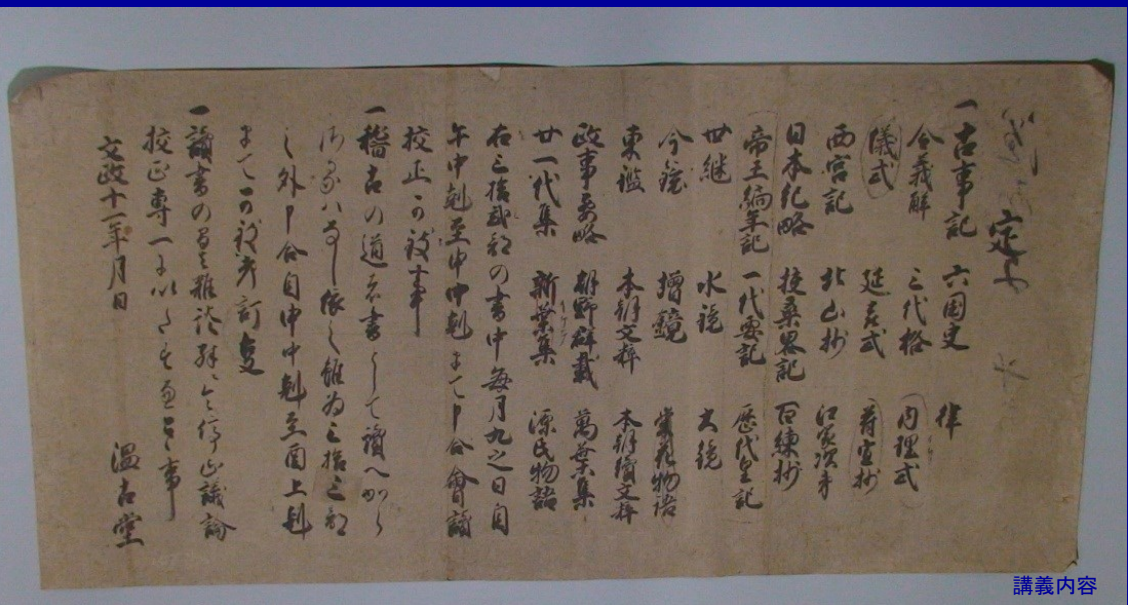
六国史・東鑑）

文学（万葉集・

源氏物語）、法

律（律・令義解）

和歌などでした。



講義内容

場所は

江戸の表六番町

文化二年

裏六番町に表六番町へ

現在の千代田区三番町二四
(靖国神社の近くです)

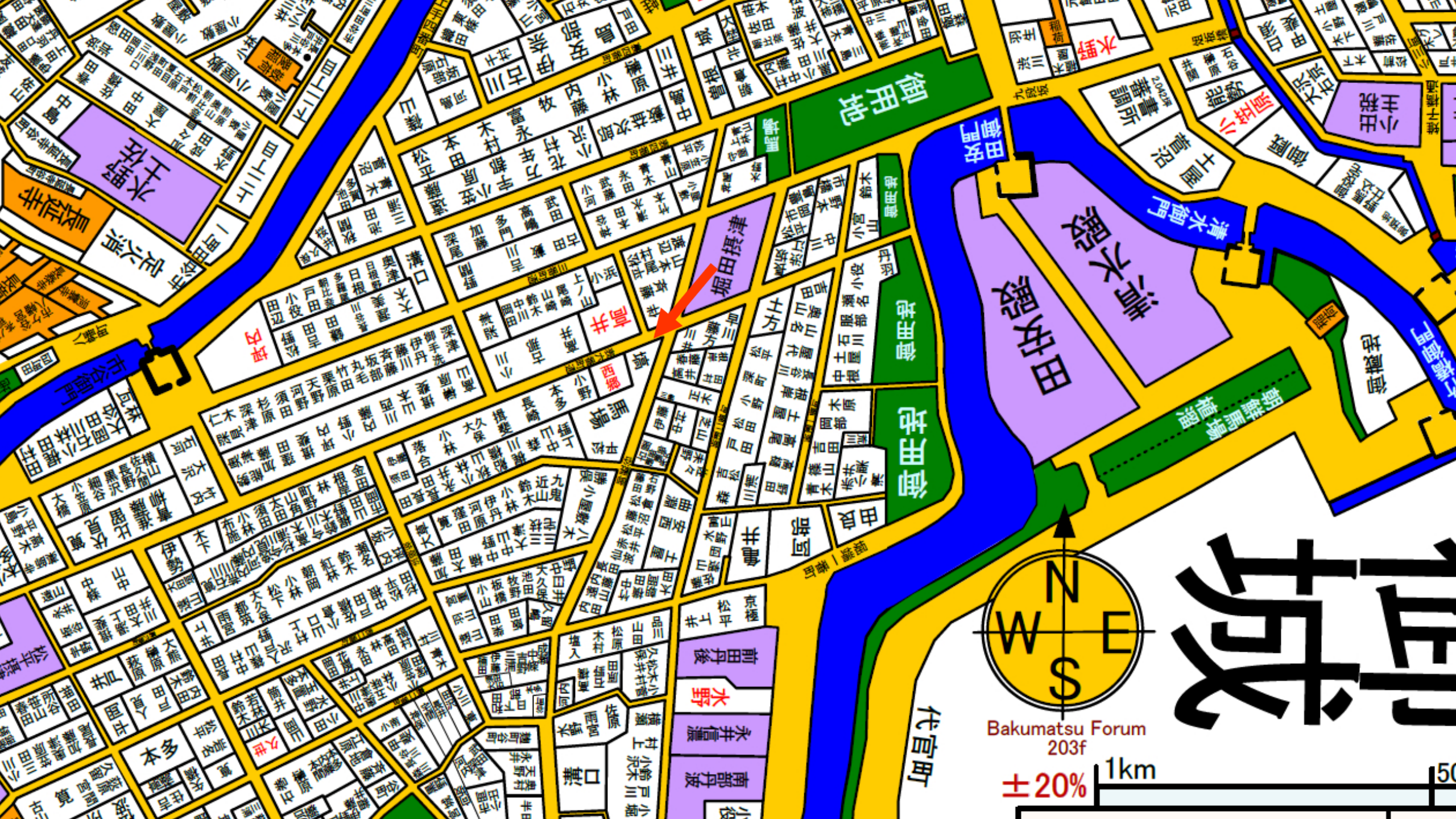


東武 高井蘭山図之

元禄九年 旧板

萬延元年(一八六〇)

改正



城



Bakumatsu Forum
203f

±20% 1km

50

会議員

埴保己一和学講談所跡



自転車通行可

はなわ ほ き いち

塙保己一和学講談所跡

Remains of Hanawa Hokiichi's Wagaku Kodanjo

東京都指定旧跡

1955年（昭和30年）3月28日指定

塙保己一は、武蔵国児玉郡保木野村（現在の埼玉県本庄市）の出身の学者で、若くして目が不自由となりました。

江戸に出て、最初は音曲などを学びましたが、次第に学問に励むようになります。

1793年（寛政5年）に表六番町通（現在の四番町4番地）に和学講談所を設立しました。1805年（文化2年）になると、表六番町の屋敷が御用のため収公され、代わりに表六番町通（現在の三番町24番地）に移転しました。

和学講談所では、日本の古文獻が広く調べられ、集大成となる「群書類従」が編纂されました。



塙保己一正装画像 漢学学会提供



塙保己一エピソードその九、

保己一の人物

『群書類従』（六六六冊）は日本で最初の本格的な出版事業であった。広告募集をかけ、限定予約出版で購入者に負担がかからないよう、月四冊の配本としたのは画期的であった。このほかにも盲人一座の綱紀肅正を図ったり、豪商との借入金交渉、幕府との政治折衝、公家・藩主・知識人との交流など幅広い人脈を構築し庶民からも親しまれ、講談や川柳、逸話などにも名を残している。



川柳では

番町に

過ぎたるものは二つあり

佐野の桜と塙検校

番町は、東京都千代田区の西部。

江戸時代は小禄の旗本や大番衆（警護）の屋敷地。

桜は佐野善左衛門の屋敷のしだれ桜。屋敷跡は大妻女子大学になっています。

番町で

目あき目くらに道を聞き

この頃、武家は表札を出す習慣が無く、番町は迷路でした。

また「道」には、**学問の道**という意味が含まれています。

注…「目くら」は放送禁止用語になっていますが、当時の川柳を紹介するために表示しました。

塙保己一の人物像

塙先生について書かれた書物は数少ないです。

なかやま のぶな

弟子の中山信名が書いた

「温故堂塙先生伝」

はぎの のぶとし

松江藩士の萩野信敏が書いた

「塙勾当伝」

はなわじろう ただとみ

そして息子の塙次郎忠宝が書

きつ

いた「塙先総検校年賦」

の三つの伝記があります。

森観斎の描く保己一肖像

人の肖像世ふ多しとて人ぞ
いふの如くうけり。いふと
あり。いふと。幸うて数
年の後。又
及たとも
あらず
あらば
親く
先づ
まゝ
なまひ
どひ
ふたふた

高先生肖像



を好まず、

高先生

昔は国語の教科書にも



参考】国語の教科書

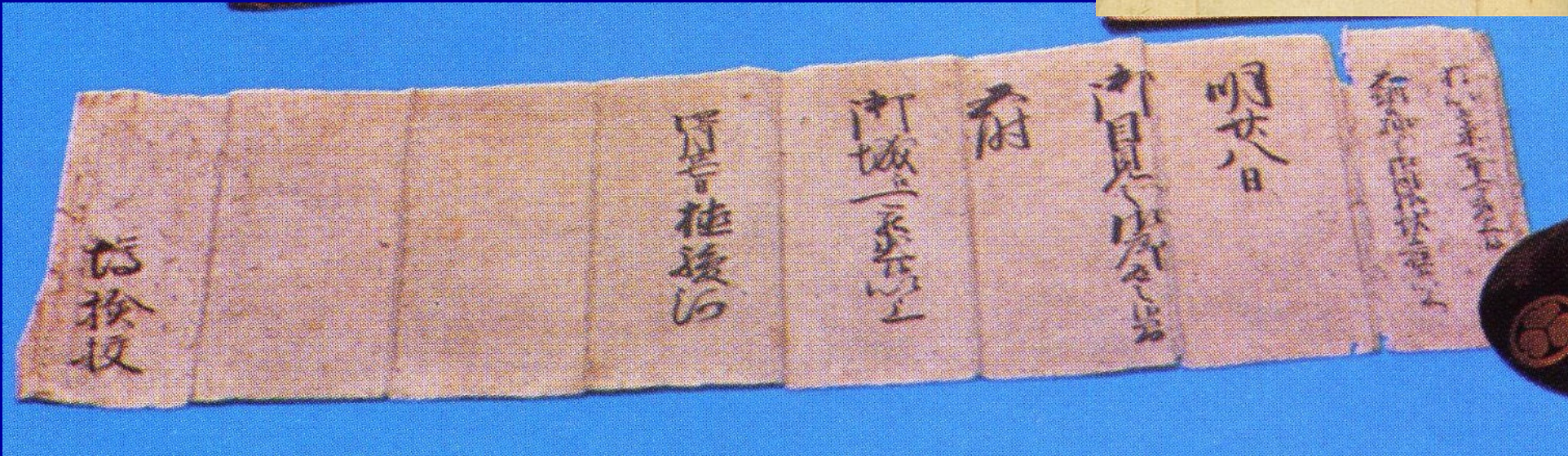
塙保己一先生は盲目ですが、学問が好きで、いつも他人に本を読んでもらい、その本は全て暗記しました。ある夜、先生が講義していると、風が吹いてロウソクの灯りが消えました。生徒達は「先生、灯りが消えたのでしばらくお待ちください」と言いましたが、保己一先生は笑って「さてさて目あきは不自由なものですね」と笑ったそうです。



第11代将軍

とくがわ いえなり

徳川 家斉



塙保己一記念館 蔵

七〇歳・将軍お目見え

文化十二年（一八一五）

和学者としての御目見え

四月二十七日、

若年寄植村駿河守家長より二十八日
將軍お目見えを伝えられる。

四月二十八日、

十一代將軍家斉へのお目見え。

「総検校になつてから御目見を仰付
けられても、それは総検校としての
ものである。検校としての御目見で
なく、和学者としての御目見を仰付
けられたいというのが願である。そ
うすれば和学を心掛ける人々の励み
にもなることである。」

七月、御目見医師の待遇
とするむね通達を受ける。



七四歳

群書類従完成

文政二年（一八一九）

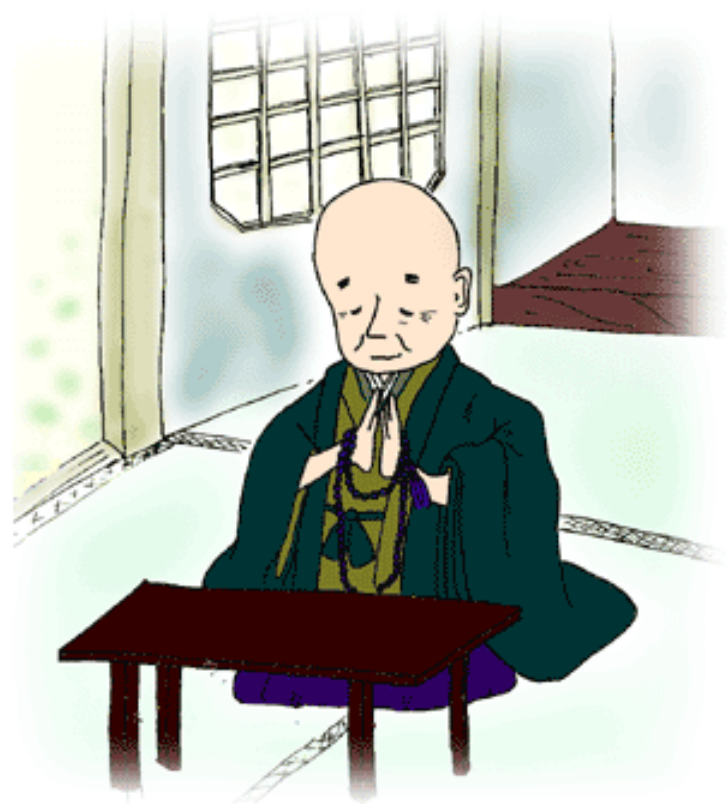
「群書類従」六百六十六冊刊行完了



塙保己一
エピソード

その一、

記憶力



保己一の書庫には六万冊の本があったとされ、そのすべてを記憶していた。

晩年、ある歌会の判者を頼まれ、五十首の歌を聞いて自宅に戻った。

さて、歌を思い出そうとしたが、どうしても三首だけ思い出せなかった。

「わしも、このようにものを忘れるようになったては、もう死ぬかもしれない」とさびしくつぶやいたという。

また、集中力を高めるため「般若心経」を毎日百巻唱え、生涯に二百二十万巻を越えた。まさに努力の人であった。

七六歳 総検校

文政四年（一八一二）

二月 京都所司代松平和泉守乗寛
から総検校跡目相続の申し渡
五月 将軍お目見え、金二枚、時
服二領とを受ける。

八月 十八日、上京（京都）すべ
きところ病に倒れ、江戸に止
まる。

八月 二十三日、総検校辞職願。

九月 十二日 逝去

翌年 四谷西念寺横町安楽寺に
葬られる。

総検校正装の保己一像



温故学会蔵

和学講談所は、七十六年間で閉鎖

江戸幕府の崩壊に伴い、慶応四年（一八六八）六月二十日、和学講談所は閉鎖されました。

（後日、改元され明治元年とされました）

その後「和学講談所」の資料は、「東京大学史料編纂所」に引き継がれました。



現在は 愛染院の墓地に

最初は四谷西念寺横町**安楽寺**に埋葬されましたが、区画整理により、明治三十年に安楽寺が廃寺となり、四谷寺町二十二番地**愛染院**光明寺に改葬されました。



「前総検校塙保己一先生墓」

和学院殿心眼智光大居士



明治十九年 保木野にも墓

保己一の後継者
塙次郎忠宝は暗殺される



塙次郎忠宝が 文久二年壬戌（一八六二）に書いたと思われる書が記念館にある。

塙保己一記念館蔵

文久二年壬戌（一八六二）二月二日、塙次郎忠宝は麴町三丁目の自宅近くで浪士により暗殺



若き日の伊藤博文

この時の浪士の二人は、若き伊藤博文と山尾庸三であったことが明らかにされたのは、ずつとのちのことである。

保己一検校の百年祭と塙次郎忠宝の六〇年祭が行われた大正一二年六月一二日、子爵渋沢栄一によって公表され皆を驚かせた。

（「塙保己一の生涯」花井泰子著）

暗殺者 伊藤博文



山口県の百姓林十蔵、琴子の長男。
家が貧しく十二歳から奉公に出る
が、父が萩藩の中間の養子となり、
下級武士の身分を得て、伊藤姓を名
乗る。

吉田松陰松下村塾に学び、尊王攘
夷運動京都市内でのテロ行動（市中
放火・暗殺・誘拐による人心攪乱）
を決行。

倒幕運動に加わり、文久二年、イ
ギリス公館焼き討ちに参加。また、
江戸幕府方とされた塙次郎・加藤甲
次郎の暗殺に加わった。イギリスに
渡航し、帰国後に革新派に加わる。

維新後は明治憲法の起草に関わり、
初代・第五代・第七代・第十代の内
閣総理大臣になる。

暗殺者

山尾庸三



山口県吉敷郡二島村（現・山口市秋穂二島）出身。長州藩士の次男。子爵。

江戸で航海術を学んだ後、密航、ロンドン、グラスゴーで五年過ごし、一八六八年帰国。

明治新政府では工部権大丞・工部少補、大輔、工部卿、法制局長官など。工部省では人材教育の必要性を説き、工部大学校（現東京大学工学部）の設立を果たす。

明治四年 盲亜学校設立建白書を太政官へ提出

明治九年 東京・築地に訓盲院を設置。身体障害者教育の面でも先覚者だった。

明治十八年 訓盲亜院直轄願を文部省へ提出、翌月訓盲亜院は官立となる。

没後百年祭記念碑（保木野）

百年祭

大正十年十一月十二日

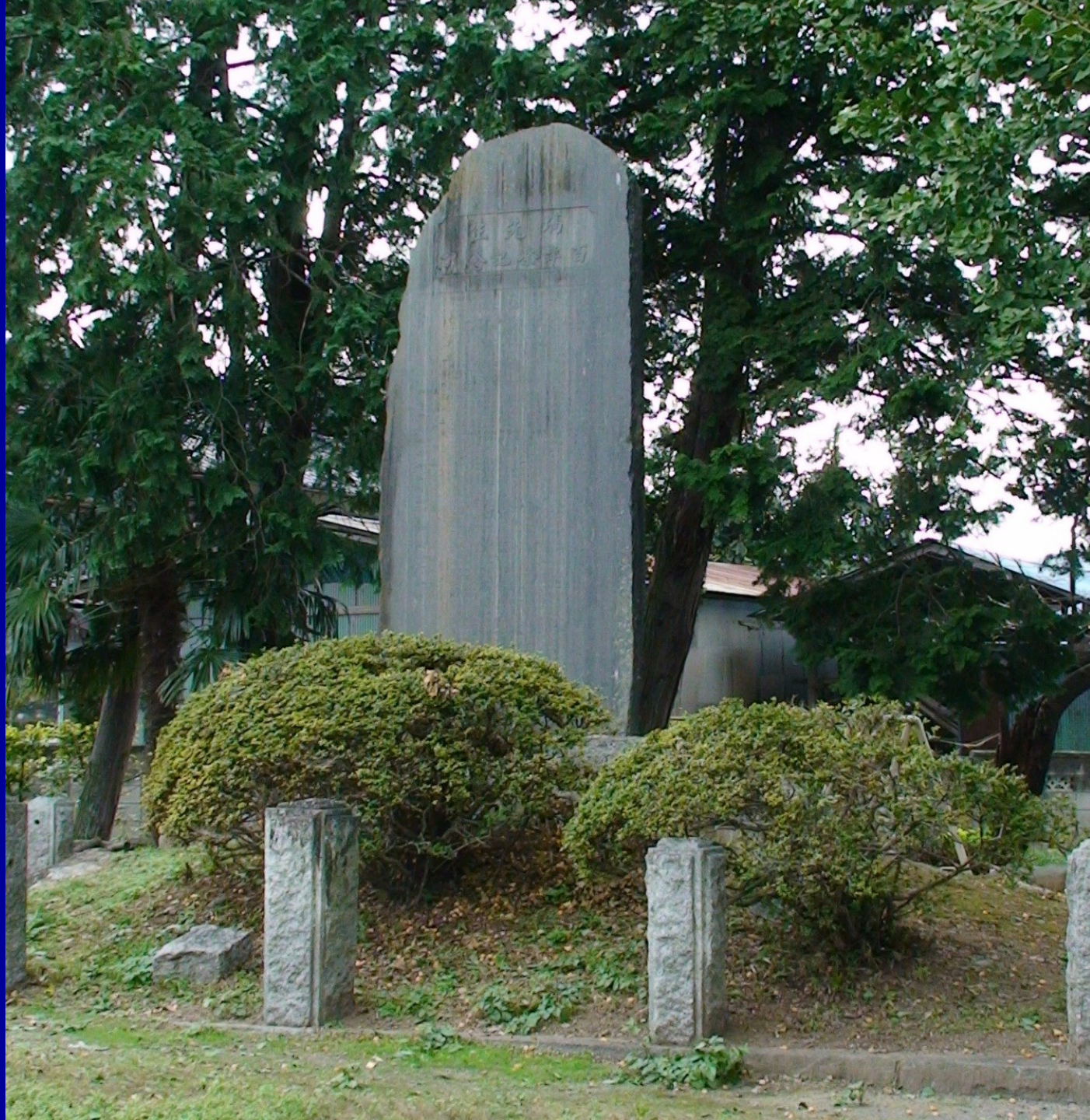
百年祭記念碑

大正十一年九月十二日

大正十二年四月十二日

題額・撰

建碑



塙先生百年祭記念碑

贈正四位塙保己一先生は東西に例なき偉人なり、この村よりかくの如き偉人を出しゝは、真にこの村又この郡の名譽といふ可し、大正十年はこの偉人の没後一百年に当れるを以て郡の有志相謀りて**遺蹟保存会を組織**し記念祭典を行ひ、尚あまねく全国の賛同を仰ぎて**記念館を建設**し、又この碑をも立つることとなせり、（後略）

洪沢栄一	題額
芳賀矢一	撰
坂正臣	書
伊藤仁作	刻

大正十年六月十二日、
百年祭の渋谷栄一挨拶文

本日紳士并に淑女の御賛同を得て
此の祭典を執行し得ることなりた
るは寔に感謝措くこと能はざる所
なり、今回更に百年祭を営みて
益々故検校の遺徳を表彰し得たる
は発起人一同深く謝する所なり。
余は故検校と均しく埼玉県出身の
ものたり。



保木野の墓は「塙保己一公園」に移転しました



墓

没後百年祭記念碑